



# にれのき



特集

20周年記念シンポジウム



## 20周年記念シンポジウム

### 北星学園余市高校との対談

# 「学び」と「育ち」の これまでとこれから

3月21日、品川区立荏原文化センター大ホールにて、エルムアカデミー創立20周年記念シンポジウムが開催されました。シンポジウムには、近年、新聞・テレビ等でその質の高い実践が取り上げられ、全国的に注目されている北星学園余市高校の佐々木校長、吉田先生をシンポジストとしてお迎えし、法政大学教授の平塚眞樹先生の司会のもと、エルム、北星余市、それぞれの教育実践を交流しあうとともに、現在の子どもたちの「社会観」や「学習観」、そこから生まれてくる教育の困難さやそれを克服していく実践の展望まで、広く深いテーマについて熱い議論が繰り広げられました。

当日は会場の都合もあり、限られた時間の中ではありましたが、大いに語り合い、私たちが積み上げてきた実践の意味を確かめ合い、エルムとその教育の「これから」を紡ぎだしていく示唆に満ちた、有意義な取り組みとなりました。

シンポジウムの詳細につきましては、後日報告集という形で皆様にご報告しますが、今号の「にれのき」では、一足早く、このシンポジウムの抜粋を掲載します。会場の熱気を少しでも感じていただけたらと思います。

編集責任 小原祐二

# シンポジストのプロフィール



平塚 まき Hiratsuka Maki

京都大学（教育学部）卒業

東京大学大学院（教育学研究科）を経て、京都大学助手、  
法政大学教員となり現在に至る

専攻は教育行政学。法政大学教授



佐々木 成行 Sasaki Shigeyuki

1944年6月 樺太（真岡）で生まれる

小学校4年までは小樽市

小学校5年から高校までは札幌市

1968年 北海道大学教育学部を卒業

（株）北海教育評論社・編集部に所属

1975年 北星学園余市高等学校に赴任

2002年 公選により校長職に就く

現在に至る（在職30年）



吉田 美和子 Yoshida Miwako

1956年7月 北海道余市町で生まれる

北星学園余市高等学校を卒業（8期生）

1974年 北海信用金庫に就職（2年間）

1976年 北海道女子短期大学に入学

1978年 北星学園余市高等学校の非常勤

1995年 専任教師として採用される（9年目）



矢沢 宏之 Yazawa Hiroyuki

1960年4月 東京品川生まれ

1979年 都立田園調布高校卒業、東京学芸大学入学

1984年1月 エルムアカデミー創立

創立メンバーの一人としてかかわる

中学部、高校部主任を歴任

地域教育連絡協議会

2001年 エルムアカデミー代表



坂口 大 Sakaguchi Dai

1974年11月 東京品川生まれ

小学校、中学校ともに品川区立

法政大学文学部入学

1984年1月 エルムアカデミーにバイトとしてかかわる

2000年3月 入社

主に中学部国語科主任を務める。



# ひとりひとりの子どもたちが人間として尊ばれる。 当たり前前だけど、難しい課題。



20年間かわらない方針は、「子どもたちに寄り添う」

矢沢 エルムの原点としているのは、子ども達の人権。一人ひとりの子ども達が人間として尊ばれる、このことを大事にしてきたんじゃないかと思えます。子ども達一人ひとりが本当に人間として尊ばれる。そういうところが今の社会の中で実際に行われていない場面が多いのではな

いでしょうか。たとえば、学校の中で勉強ができないことで人格が否定されてしまったり、高校を選ぶときにもただ単に勉強ができるかできないか、そして、スポーツができるかできないか。そういうような形でしか判断をされない子ども達というのは、人としてのさまざまな側面をなかなか認めてもらえない。本当は一人ひとり違って良いわけで、子ども達は、一人の人間、一人の人として、生きていきたい。

そういう思いを持っているわけですが、ですからそれを私達がどれだけ子ども達の目線に立っていかか。そういうことを考えて私達は実践しています。

2つ目はただ子ども達と一緒にいければ良いということではないというふうに思っています。やはり子ども達はこれから成長、発達していくわけですから、その子ども達をほんとに成長、発達させるために、より一段発達させるために、子ども達に課題を提起し、ほんとか、このままでいいのか、というような子ども達が見えな部分、私達人達がどうやって子ども達に示していくか。子ども達にわかりやすいように見せていくか。それを子ども達に提起してきた。これを大事

## 共通項は、「子どもの目線」

してきたというふうに思っています。そして3つ目は、子ども達を取り巻く私達大人のネットワーク。つまり、子ども達は、先ほど言ったようにさまざまな側面を持っており、学校でもそうですし、地域でもそうですし、家庭でもそうですし、また、友達関係もいろんな関係があります。そういうなかで、子ども達自身をほんとに人として、一人の人間として捉えるには、いろいろな、さまざまなところから子ども達を見てあげる。それがすごい大事です。私達は子ども達を見るネットワークを大事にしてきたと思っています。例えば先ほど出てきた、不登校の子ども達と仲間部と言ってきた子ども達も、私達は来れば必ず親御さんとの面談はもちろん関わっている、学校の先生達、それから学校の先生でもとくに養護の先生、それからまた、地域でさまざまな方々、例えば児童

センターですとか、学童保育ですとかそういう形で関わってきた方。また過去にさかのぼればその保育園での関係、そういう中の関係者のさまざまな話を聞いて、その子がどういう風に育ちながらきたのか、そしてどういところで問題を抱えているのか。そういうことで私達は子ども達を多面的に捉えるように努力してきたと思っています。私達のやってきたこの「子どもに寄り添う」ということをこれからも大事にしていきたいという風に思っています。

子どもとの格闘の中で、  
実践は鍛えられる

佐々木 北星高校が一番大事に  
していたのは何かということだ  
すけれど、それは子ども達は同  
世代の集団の中で社会性を含め  
て人間性を豊かにして育ってい  
くという考え方です。まずその  
生徒の生活の場である普段をい  
かに作るかということが40年前  
の創設期に追求されてきた課題  
でした。一人ひとりに居場所が

保証されて自由に意見が言い合  
えるそういう民主的な集団の中  
で一人ひとりが育っていくとい  
う風にこの40年間続けてきたと  
思います。最終的には子どももど  
うしが「駄目なことは駄目」と  
言い合える環境を作って、なお  
かつ、自分達の周辺にある様々  
な生活に関わる問題。そういう  
問題もあいつが特別な人間だか  
らしょうがないんだという形で  
切るのではなくて、自分達の問  
題として受け止めるというそう  
いう集団を作りたい。最終的に



は管理されるという側  
ではなくて自主的に自  
分達の生活を作ってい  
くという方向を目指し  
てきたつもりでいます。  
もう一つは、創設期  
の頃からそうですけれ  
どもまず公立高校に落  
ちてしまったというこ  
とはまあ勉強が出来る  
出来ないという形の評  
価基準があります。そ  
の競争原理ですとか、  
単一の人間評価とい  
うのが果たしていいの  
かというところで悩ん  
できた子ども達を対象に  
してきましたので私達  
は勉強もそうですけれ  
ども、それよりも自分  
自身を取り戻して自  
分に素直になれて自  
分の能力が素直に発  
揮できて様々な分野  
で輝いて活動できる  
ということを評価して  
きております。様々  
な行事がありますけれ  
ども普段の生活の中  
ではなかなか見れな

## それぞれの教育、その原点

かった一見おとなしく  
な行動力のないような  
生徒も行事の取り組み  
の中で自分の与えられ  
た範囲の仕事を引きつ  
つとやり通したという  
ことについてはみんな  
で評価したいという、  
そういう一つ一つの積  
み上げの中でなんか  
自分のいることにつ  
いての意味、というの  
を意識して自分自身  
を取り戻していくとい  
う形です。子ども達  
が成長してくるとい  
う風に思っています。

それともうひとつ言  
うことが出来ること  
は、北星余市高校の  
教師集団はぬきん  
でた力があって、ば  
んばんやっていくとい  
うような先生はほと  
んどいません。一般  
的に言うところの普  
通の平凡な教師の集  
まりです。けれども、  
生徒達との関わりで  
いきますと担任団が  
生徒の最前線に立つ  
というその考え方を  
ずつと貫いてきてい  
ます。常に生徒の情  
報もそうですけれど  
も一つの方針を持つ  
たときに誰に聞いて  
も同じ形で言える。そ  
のく

らい担任の横のつながり  
を大事にしている。生  
徒に向かっているとい  
う意味では生徒集団  
と担任団の闘いと言  
いますかね。そういう  
ところで一致団結し  
て生徒指導に当たっ  
ていくということと  
ころを大事にしてお  
ります。担任はクラ  
スの生徒の責任を持  
つし、まあ学年でそ  
の学年の生徒の責任  
を持つということ  
です。

今、マスコミ等で色々  
北星余市高校が取り  
上げられています。け  
れど、日常の学校生  
活はごくごく一般  
的で普通で、それか  
ら教師がそれほど見  
通しを持ってやって  
いるのではなくて日  
々忙しさの格闘の中  
で進めています。け  
れども最低限の視点  
というのは担任が  
は、体調が悪いとき  
には担任がまずその  
子の状態を判断する  
というそこら辺が原  
点かなと思います。

子どもたちは、同世代の集団の中で社会性を含めて、  
人間性を豊かにして育っていく。

# 現場の声を聴く

「むかつく」から「うざい」へ

坂口 特に教育現場からというところで、いくつかあります。私が今特にすごく子ども達を見ていて気になるのは、これはよくお父さんお母さんと話しをするんですが、5年生くらいから言葉の変化というものをすごく感じるんです。特に、こちらの今日のパンフレットにも書いてありますが、むかつく」と言う言葉がずいぶん消えてきた。それに変わって今子ども達の中に「うざい」とか、「きもい」「きもつ」とか。あと、「だるい」「とか」「はあ」「とかいう様な一種の感情を、怒りをもった、「むかつく」という感情語からすべてを放棄したくなるよくな、もう関わらないでくれっていう様な感覚語に子ども達の

意識の変化があるようにすごく感じています。これは僕らとしてはものすごく危機的なことだなと思っっています。それはどういうことかというところ、まだ感情語を持っていたときは対象があつて、そこに対する怒りみたいなものがあつて、そこでぶつかり合えばよかつたんだけれども、もう今だんだん、他者との関係を拒絶するような、関わりたくないんだつてそういう方向に子ども達の意識がなつてきているんじゃないかという危惧を持っています。それはどうということ

は「自分らしく生きたい」とか、「自分らしさを見つけたい」とか、「よりよく生きたい」、「幸せになりたい」って思いを持つてるんです。そして、その思いにどういう風に答えていくのかというときに、まずは自分をしっかりと発見させる。自分が発見しなければその先が見えてこないわけです。それでは、どういう風に自分を発見させるのかと言つたときに、エルムがずっとやってきたのは、やっぱりあくまでも集団の中でその子らしさつていうものを発見させる。これはおそらく余市の考え方と近いと思います。「集団の中で自分を見つめていく」、「自分を発見する」、「逆に仲間も発見していく」。そういう関係を大事にしてきました。ですから、今の子ども達

が何かそういうものから、離れたつたつあるような今の問題はすごく、危惧を感じているんです。それではエルムは今、何をしているかというところ、卒業生達が書いた文集が、ここ3、4年の文集を見ると、決まってキーワードになつてくるのは「話し合い」なんです。話し合いをした。とにかくとことんまで話し合いをした。そこで自分が見えてきた。仲間も見えてきた。今まで話し合う、自分の意見を出す。学校だつたら馬鹿にされた。シカトされた。無視された。いじめられた。だから、もう自分を出すのをやめよう。沈黙しようと思つた。でもエルムはそうじゃなかった。自分を出すところ、答えてくれる仲間がいて、そのことによつて自分も見えてくるし、仲間も見えてくる。そういうふうに見えてくる。そういうふうなこと、子ども達の成長を勝ち取つてきたんじゃないかという風に思っています。今僕らが

すごく大事にしている話し合つてものを、先ほどの佐々木先生のお話ではありませぬけれども、より高めていく。話し合い自体がやっぱり当たり前のことのようになつていける、そういうもう一つ高いものを目指しながら今やっているところです。





## 素顔の自分を「語る」子どもたち

吉田 自分ひとりが不登校じゃなくて、こんなに学校行かなかつた仲間がこのクラスの中に3分の1以上もいますから、同じ苦労って言うか、同じ辛い思いをしてきた仲間が、ここの、学校にくると隣にも後ろにも前にもいるんだっていうなんか安心感みたいのがあつたりします。

それから「実は俺少年院経験してきている」とか、「施設にいて実はバイク盗んでどっのどっの」とかって話しても、普通ならできない話ですよ。でもきつと、寮の生活の中の先輩後輩、縦の

つながりと、それから同じクラス、同じ学年の横のつながりの中で、「実は俺万引きしてつかまって少年院にいたんだ」とか、そういう話しても自分の経験として、話し合うことができる場が北星余市なのかなって担任をしていてすごく感じていきます。

よその学校ってどうか一般的な学校では多分こういう人間関係っていうのはなかなか作れない。「俺やり直しに来たんだ」「もう2度とシンナーには手を出さないつもりで来たんだ」「だから俺がシンナーやるうとしたとき

にはぶん殴ってもいいからとめてくれ」とか。そういう話のやり取りも、うちの学校の中ではありなんです。それが集団なのかなっていうのを今エルムさんの方から感じました。そういう同じ立場で辛い思いや何かを経験してきた子達が同じ子とこ語り合っって仲間意識をつなげていけるといって「学ぶ場」っていうのは、なかなか他にはないんじゃないか。私はこれを今すごく自信もっています。一人でやることはできないけれど、みんな渡れば怖くないみたいなどころが一番あるのかも知れないんですが、そういう自分だけの悩みじゃなくて、同じ悩みを持つている人が他にもいるんだっていう、そういう人間関係が分かる、そういう人間関係を作っていけるといってところが、すごく北星余市の中では大事にされているところだと思っています。

## そして、これから

課題は「社会」とのつながりを紡ぎだすこと

矢沢 エルムのことからという意味では、私達はESSというもののW作っています。エルムで育ってきた子達が、将来その仕事につけるといってことです。今子ども達はエルムを育てて出て行きます。なかなか就職の口がないだとかっていうことがあります。沿うならば仕事を自分達でつくっていきたいという今考えて、いろいろなることを私達のできる範囲でやろうとしています。1つは、ホームページを作ったり、そういう中でITの分野でやってきたりだとか、それから業務委託の部門で実際に病院の業務をいくつか頂いて、そこに仕事をしながら、実際に働いてもらいながらいろいろな経験を自分でい。それからそういう中で今度ジョブコーチみたいな形で仕事を教えていく。なかなか不登校だとかで人間関係うまく作れない子達。そういう企業の中に入れば、ようは競争です。「できない子はもう駄目だ。お前なんかもう明日からなくていい」みたいなこと言われちゃう訳です。そうではなくて、やはりそういう子達の特性を僕らが見ながらエルムとその職場をつなぐような、何か橋渡しができるような仕事ができないかということを考えています。そういう中でひとつひとつのことが、うまくこう結びついていけば、新しい地域とエルムが結びつく何かができるんじゃないかというふうに考えています。



そこに仕事をしながら、実際に

## 夏期講習生募集中!



夏休みも間近にせまってきました。エルムでは、今年も夏期講習を実施します。夏休みは、「基礎固め」の最大のチャンスです。今までの遅れを取り戻したい人、2学期に向けて、確実にステップアップしたい人、この夏、エルムでしっかり学んで確かな力を身につけよう! 詳しい資料請求やお問い合わせは、下記までご連絡下さい。

## パソコンの“?”もエルムにお任せください。

- 1 パソコンを使えるようになりたい
- 2 パソコンの故障・トラブルで困っている
- 3 インターネットやメールを利用したい

パソコンを使おうと思っても、多くの方にとってはパソコンはまだまだ難しいものです。エルムでは、そうした方々のために上のようなパソコンの“?”に答えるサービスもしています。パソコン指導では自宅までお伺いして丁寧にお教えいたします。また、トラブルや設定の対応も迅速に行ないます。

## お知らせ

品切れでご迷惑をおかけしていましたが、2003年度中学部まとめの文集、小学部特別カリキュラム報告集の増刷が完了しました。ご希望の方には無料でお分けいたしますので、お気軽にお問い合わせ下さい。

また、今号のにれのきで特集しました、20周年記念イベントの報告集とビデオも間もなく完成します。こちらは、ご希望の方には1,000円(税・送料込)でお分けいたします。購入希望の方は、下記連絡先までご予約をお願いします。

発行：) " Q ' h k 4b P

品川区中延 5-6-14-2F

TEL 03-3784-5676

FAX 03-3784-5609

e-mail [elm@kiwi.ne.jp](mailto:elm@kiwi.ne.jp)

HP <http://elm.m78.com/>